

協同学習を取り入れた中学校英語科の授業改善

江利川 春雄（和大教育学部・代表）、大野 傑（和歌山県立向陽中学校）

菊池 有紗（和大附属中学校）、高瀬 麻美子（和大附属中学校）

I. 本研究の目的と意義

本研究の目的は、中学校英語科を主な対象に、協同学習（collaborative learning/協働学習）を取り入れた授業改善の方法、成果、課題を継続的に明らかにすることである。

協同学習とは、「少人数集団で自分と仲間の学びを最大限に高め合い、全員の学力と人間関係力を育て合う教育の原理と方法」（江利川春雄編著『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』大修館書店、2012、6頁）である。2020年度から施行が始まった新学習指導要領の基本方針は「主体的・対話的で深い学び」の実現であり、協同学習を核とした授業改革を本格的に打ち出している。さらに、2021年1月の中央教育審議会答申『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の副題が「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現」となっているように、協同/協働学習は今後の教育改革の重点事項となっている。

協同学習は先進国における「21世紀型学力」のキー概念の一つとなっている。今後めざすべき教育の方向性を規定したOECDのEducation 2030では、「社会を変革し、未来を作り上げていくためのコンピテンシー」（Transform Competency）を掲げている。その概要は、①他者との協力と協働により既存の知識から新しい知識を生み出す力、②対立やジレンマを克服する力、③責任ある行動をとる力の育成である。

協同学習が求められる背景には、学習環境の激変もある。2021年度から本格実施されるGIGAスクール構想によって、教育と教材のデジタル化が一気に加速する。生徒が日常的にコンピュータやICT機器を利用し、人工知能（AI）の普及が著しい今日の知識基盤社会においては、教師主導のCalk & Talkによる講義・解説型の授業スタイルから、学習者同士が学校内外の人々と協同しながら、主体的に学修に取り組んでいく協同学習へと、授業を転換させる必要が急務となっている。

また、新型コロナウイルスによる感染拡大によって学校の休校措置や遠隔授業を余儀なくされる中、生徒同士が直接的に関わり合い、心を通わせ合う協同学習の教育的価値は高まるばかりである。

II. 2020年度の活動概要

2020年度は新型コロナ禍によって活動を著しく制約されたが、オンラインでの実践・交流を含め、以下のような取り組みを行った。

- 2020年9月16日 岸和田市立光陽中学校授業研究会（協同学習に関する江利川による指導助言）
- 11月4日 「三観点を踏まえた三密にならない協同学習」 大阪府泉南郡中学校教育研究会英語部会 煉瓦館コットンホール（江利川による講演・ワークショップ）
- 12月18日 「協同学習を取り入れた中学校英語科の授業改善」に関する全体会 和歌山大学教育学部での対面式およびオンライン併用（本共同研究メンバー全員および大学院生の実践報告と討論）
- 12月26日 「中学校外国語科における協同学習が英語レベルの異なる学習者に与える影響」 神戸英語教育学会での口頭発表（村上加奈：和歌山大学大学院教育学研究科院生）
- 2021年1月10日 「高校外国語科におけるジグソーを用いたコンピューターゲームの活用法」 新英語教育研究会関西ブロックでのオンデマンド発表（ロマン・エデルマン：和歌山大学大学院教育学研

究科院生)

- 1月20日 岸和田市立光陽中学校授業研究会（協同学習に関する江利川による指導助言）
- 2月3日 「子どもの主体的な学びを育てる協同学習」 枚方市教育委員会「令和2年度 学力向上担当者研修(2)」 オンライン講習（江利川による講演）
- 2月6日 「主体的・協同的な学びの授業づくり」 大阪教育大学附属天王寺中学校・高等学校天王寺校舎第67回教育研究会英語分科会（江利川による指導助言）
- 2月9日 熊取町立熊取中学校授業研究会（協同学習に関する江利川による指導助言）

Ⅲ. 中学校における研究・実践の事例（概要）

① オンラインで外部の外国人講師に日本文化を紹介する活動 高瀬 麻美子（附属中学校）

1. オンラインレッスンについて

(1) 3人一組、iPad1台、講師1名

メンバー同士で助け合いと学び合いが可能であり、英語に苦手意識を持つ生徒の負担感の軽減になる。フィリピンの英語学校でのお試しレッスンでは、3人一組で1人1台のiPadを使用したとき、接続状況が悪く音声や画像が途切れたため、1台のiPadにスプリッターをつないで音声を分配したところ、安定した。1人欠席した場合も2人なら心細さがない。

(2) フリートークとワークシートを用いた活動

どのフィリピン人講師も一定程度日本人の特性や日本文化への理解があり、生徒の興味関心に寄り添い、笑顔で励ましながら楽しくレッスンを進めてくれる。授業の初めにウォームアップ的に簡単なフリートークを入れ、先生と打ち解けたあとにワークシートを使った学習を行った。ワークシートは、こちらの授業進度に合った希望に沿ったものを作成してもらったこととした。また、生徒の状況に合わせ、最後にフリートークを入れるなど臨機応変な対応をしてもらった。

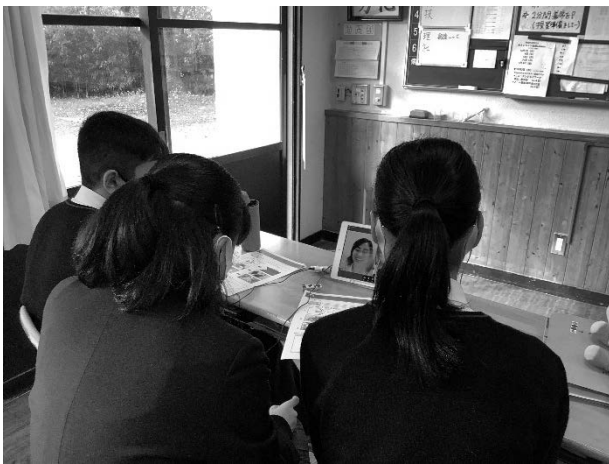
(3) 実施概要

1回25分のレッスンを計5回行った。セブ島は日本との時差が少なく、レッスン料は比較的安い。今年度はコロナ対策として特別な予算があり、保護者の費用負担なしに実施できた。グループは初めの2回は入れ替え、3回目以降はプレゼン作成に入ったため、メンバーを固定した。講師も初めの2回は固定し、3回目以降は入れ替えてもらい、様々なタイプの講師先生とのコミュニケーションを体験させた。

2. 日本文化紹介 Show&Tell プレゼンテーション

ワークシートを用いたレッスンは、とすればパターンプラクティス的な画一的な活動に終始してしまいがちで、文法事項の定着には適しているが、コミュニケーションの要素が少なくなりがちであった。そこで、講師の先生が興味を持ちそうな日本文化を紹介する Show&Tell のプレゼンを行わせることにした。グループで作成させ、もう1台のiPadで写真などを見せながら行わせた。3回目のレッスンでは、セブ(フィリピン)の文化紹介を講師先生から聞き、その内容について生徒から質問したり、プレゼンで気を付けたいポイントなどを学んだりした。4回目のレッスンで、プレゼンのリハーサルという形で講師先生にプレゼンし、内容に関して先生からの質問に答え、プレゼンの仕方の改善点を教わり、最終回5回目のレッスンで、前回とは違う講師にプレゼンを行った。評価に関しても、こちらから評価項目と規準を伝え、外国人講師に評価してもらった。

講師の先生の優しい笑顔と楽しい雰囲気作りのおかげで、ほとんどの生徒がオンラインレッスンを楽しみにし、集中して取り組んでいた。プレゼン英文作成や発表練習では、グループ内で表現方法を互い



に学び合うことができた。

コロナ禍で、今年度は本校が行っている海外の学校（アメリカのロン・クラークアカデミー、タイのカセサート大学附属学校）との交流活動がすべて中止になる中、今回のオンラインレッスンはネイティブスピーカーとコミュニケーションをとる貴重な機会になった。学校でも社会においても今後オンラインでの学習・仕事が行われることが当たり前になっていくことが容易に予想される中、写真の見せ方ひとつをとっても、どうすればより相手にわかりやすくきちんと伝えられるかなどについても考えさせることができ、新しい時代を生きる大切なスキルを身につけるための活動にもつながったと考える。

② 生徒同士の主体的な学びから生徒個人の学ぶ意欲の促進へ 菊池 有紗（附属中学校）

1. 生徒に学ぶ意味と必然性を与える

新しい文法の指導や、それを使ったアクティビティを行う授業に、生徒が主体的に動く場面を設けることは普段から頻繁に行っているため、授業者としてこちらが意図したゴールを明確に描くことが出来る。今、私はリーディングやリスニングの授業をいかに生徒が主体性を持って取り組むことが出来るかを、様々な教材を通して実践している。リーディングやリスニングに特化した授業は、生徒が受け身になりがちである。読む活動、聞く活動そのものが受け身な活動であるという特性を持つからだ。そのような特性を持ちつつ、生徒にとって主体的に動くことのできる「仕掛け」を作るには、生徒に学ぶ意味と必然性を与えることが必要ではないかという仮説を立てた。

実際に取り組んだ授業実践には失敗も成功もあるが、今回は自分が実践した授業の中でも、生徒ひと

りひとりがしっかりとした目標を持って積極的に取り組む様子が見られた授業実践を紹介したい。

2. リーディングの授業実践

- (1) 長文の教材をおおまかに聞き取り、ホームグループで内容を確認しあう。(1時間目)
- (2) 長文の教材を段落ごとにグループ内で担当を割り振り、エキスパートグループに分かれ、読解を行う。(1時間目)
- (3) エキスパートグループ内で、ホームグループメンバーのために8分間の授業を作る。(2・3時間目) ※生徒が用意する教材に指定は無く、生徒がホームグループのメンバーに説明するのに必要だと感じた場合、スライドやワークシートを必要なだけ作る。エキスパートグループで共有可能。
- (4) ホームグループへ戻り、授業を行う。(4時間目) ※その際、聞き手は授業者をプロだと思い、積極的に質問し、ノートを取るように声掛けをする。

この授業実践は、2019年度から実施している。ここでの「学ぶ意味・必然性」とは、ホームグループのメンバーへ伝えること、ホームグループのメンバーから本文の内容を学ぶことである。自分の担当段落に責任を持って取り組むことによって、必然的に「このように伝えたらわかりやすいかな?」「スライドがあれば、あの子でもわかってくれるかな?」「発音をしてあげたほうが、あの子にとってわかりやすいかな?」という思考に至る。

また、授業本番(4時間目)では、残りのメンバーから積極的な質問を受けることにより、自分でも気づかなかった「分からなかった」ところが何であるかがよくわかる。日頃、教師が生徒の反応から学ぶように、生徒同士の学び合いには、新しい学びのステップに繋がる効果があると考えられる。

生徒がタブレットで作成したワークシート



単語の発音を調べ、発音指導をする生徒(右)



3. 今後の展望

このような授業が生徒にとってやりがいを感じられる活動になっていることは、ロイロノートによる振り返りを見ても明白である。しかし、教師として現在の抱える課題は、評価の仕方である。各グループで一斉に授業をすると、授業態度を見たつもりになっているだけではないかと思う。手元に残る材料として、今年度は振り返りシートをしっかりと書かせたが、さらに工夫できる点を今後も探り、さらにブラッシュアップした授業へと変貌させたい。

③ 計画を示すことの重要性 大野 傑（和歌山県立向陽中学校）

教員の仕事はけっこう場当たりのである。年度初めにどの時期にどの内容を教えるかの見当をつけるため、教科書をペラペラとめくる。いざ授業が始まると、教科書をページの順にこなしていき、定期試験が近づくと進んだところまでを試験範囲とする。気が付けば夏休みが近づき、業者から夏休みの宿題となる冊子を一括購入する。休みが終わればその冊子を提出させ、その内容を評価に取り入れる。このようなルーティーンを年度終わりまで繰り返し、一年が終わる。

場当たりのになってしまうにはいくつか理由がある。①実際に受け持つ生徒の能力やクラスの雰囲気によって授業を進めるスピードを変更する必要がある。②予定の決まっていない学校行事が急に入る、予期しない生徒指導が生じるといった一定のペースで授業を行えないと言った理由がある。その結果、生徒は長期的な視点を持たずに、その日暮らし(学び)を繰り返すことになる。

「逆向き設計」という理論がある。先にゴールを定め、そのゴールに到達するために道筋を立てるという発想である。この理論を教育現場に当てはめれば、先に生徒に1年間を通して身につけさせたい能力を明確にした上で、年度末の定期試験を作成し、その試験で結果を残せるようにするためにはどのような順で、どのタイミングで何を教えておくべきかを先に決めておく必要がある。普段から年度初めに目標を定め取り組んでいるかとは思いますが、より明確に道筋を立てることになる。

4月、初めの授業でかなり細かい1年間の学習計画表を生徒に配布した。その計画表には、年間に実施する全ての定期考査の範囲、小テストの範囲、長期休暇中の宿題や提出物、プロジェクト学習の内容がおおよそその実施時期と共に記されている。全て記してあるので、定期試験前になって、試験範囲を知った生徒から「え～、範囲が広すぎる!」といった声は聞こえない。むしろ、「英語の範囲はもう先に終わらせてあるから、苦手な数学に時間をかけよう」といったことを言う生徒が多かった。もちろん、「範囲は知っていたけれど、何もやっていない」という生徒もわずかながらいたのだが。

逆向き設計論に基づき1年間を計画的に取り組んだ結果、生徒は自分で計画を立て学習に取り組むことができるようになった。授業を行う側からすると、4月初めに緻密な計画を立てるのにかなり時間と労力が必要であったが、その後は計画通りに進めていくので、テスト直前や年度末に学習内容を詰め込みすぎることなく取り組めるので全体としては楽になったように思う。

4. 考察と課題

文部科学省が新学習指導要領で「主体的・対話的で深い学び」を打ち出したこともあり、学校現場では協同学習に対する関心が高い。学校間および教師間での実施状況に隔たりはあるものの、協同学習は着実に実践が進められ、日々進化している。

各地の教育委員会が「〇〇市スタンダード」などの名称で、授業冒頭での学習のめあて (Today's goal) や授業の流れ (procedures) の提示、個人で学ぶ時間、仲間と協同する時間、振り返りなどを組み入れた標準的な授業フォーマットを作成し、教員に働きかける事例も増えている。

協同学習の導入によって、まず教室が「しっとり」とした学び合う空間に変容し、時間差を伴って学力が向上する。本研究グループでも、協同学習による意欲と学力の向上、学力格差の縮小などが検証できた。

他方で、伝統的な教師主導/生徒受動による一斉講義型の授業スタイルを、生徒主体の協同的な学び合い重視に転換させることに苦慮している学校も少なくない。学校全体の改革には、教員間のビジョンの共有、校長や研究主任のリーダーシップ、外部講師の助言が必要で、3年程度かかる事例が多い。

協同学習では、机を合わせるだけの「形」ではなく、生徒同士の関わり合う関係性と、学びのワクワク・ドキドキ感に満ちた「協同する必然性」を組み込んだ課題設定が重要である。たとえば、「関係代名詞の使い方を理解する」ではなく、「関係代名詞を5つ以上使い、班で自分の町の魅力を外国人に説明できる」の方が協同性を高めやすい。生徒同士が関わり合い、高め合う必然性を組み合わせることによって、グループダイナミクスが引き出されるのである。

協同的な学びの形態としては、男女混合の4人程度のグループ編成が一般的だが、それがときとして同調圧力や息苦しさを招く場合もある。そうした場合には、自由な「立ち歩き」を認め、個人、ペア、グループといった学習形態やメンバーを自由に選ばせることで、学ぶ意欲を喚起することができる。ある高校では、教室外の任意の場所での学びも認めることで、主体的に学びに向かう力を発揮させていた。学習形態は柔軟に考えるべきであろう。

協同学習に対する経験不足ゆえの不安がまだ根強く、改革に踏み切れていない教師や学校も少なくない。特に、学校が安定しており、生徒の成績が良好な学校では教師の危機意識が乏しく、改革への意欲が低い場合が多い。逆に、危機意識は高いが、生徒指導に追われて授業改革に注力できない学校もある。だが、学び合う質の高い授業こそが、最高の生徒指導である。

授業改革の意義と必要性を共有化するとともに、教師の多忙化を緩和し、協同的な授業づくりと指導者育成のための研修時間の確保が急務である。また、教員養成段階での協同学習の原理と方法の指導と、そのための大学授業の講義形式から協同学習形式への転換が必要である。

本共同研究は、研究代表者の定年退職もあり、2020年度をもって終了する。最後に、これまでの研究と実践を踏まえて、以下の10項目を提言する。今後の実践に活かして頂ければ幸いである。

- ・全員の学びを保障し、一人も見捨てないために、一斉講義型授業を脱却する。
- ・学力向上は結果、まずは安心して仲間と学べる居場所をつくる。
- ・教員は舞台裏で授業設計と教材作成に注力、授業中の役割を極小化する。
- ・教員が話せば話すほど、子どもたちは学びから離れていく。
- ・わくわく感のある高度で応用的な課題ほど子どもは熱中する。
- ・探究的な目標と流れを明示し、あとは子どもたちに任せる。
- ・自由な立ち歩きを許し、個人・ペア・集団などの学習形態を選ばせる。
- ・振り返りは授業中に済ませ、終礼をやめ、学びに夢中なまま授業を終了する。
- ・校長と教員の異動に備え、獲得した成果と課題を着実に伝承する。
- ・保護者に情報を公開し、「教え込まない授業」への理解と協力を得る。

主要参考文献

- 江利川春雄編著（2012）『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』大修館書店
- 江利川春雄（2016）「DVD アクティブ・ラーニングによる協同的な英語授業づくり」ジャパンタイム
- 胡子美由紀（2011）『英語授業ルール&活動アイデア 35』明治図書
- 佐藤雅章ほか（2015）『子どもと教室の事実から学ぶ：「学びの共同体」の学校改革と省察』ぎょうせい
- 佐藤学（2006）『学校の挑戦：学びの共同体を創る』小学館
- 佐藤学（2021）「探究と協同の学びの創造」第19回学びの共同体研究会全国大会講演資料
- 根岸恒雄（2019）『英語授業・全校での協同学習のすすめ』高文研